

お雇い外国人概説とホーレス・ケプロン

平成 23 年度札幌シティガイド フォローアップ研修講座「開拓使時代とアメリカ人」

第 1 回講座 平成 23 年 11 月 30 日(水) 14:00~16:00 実施

(担当講師) 北海道・マサチューセッツ協会 理事・事務局長 中垣 正史



ケプロンとその一行 1871 (明治4) 年ごろ
左よりJ. クラーク、ケプロン、ウォーフィールド、アンチセル、エルドリッジ



黒田 清隆

(天保11年～明治33年)

Kiyotaka Kuroda (1840-1900)

旧薩摩藩出身

開拓長官、第2代総理大臣



ベンジャミン・スミス・ライマン

Benjamin Smith Lyman

(1835-1920)

アメリカ合衆国 マサチューセッツ州出身

地質測量・鉱山技師

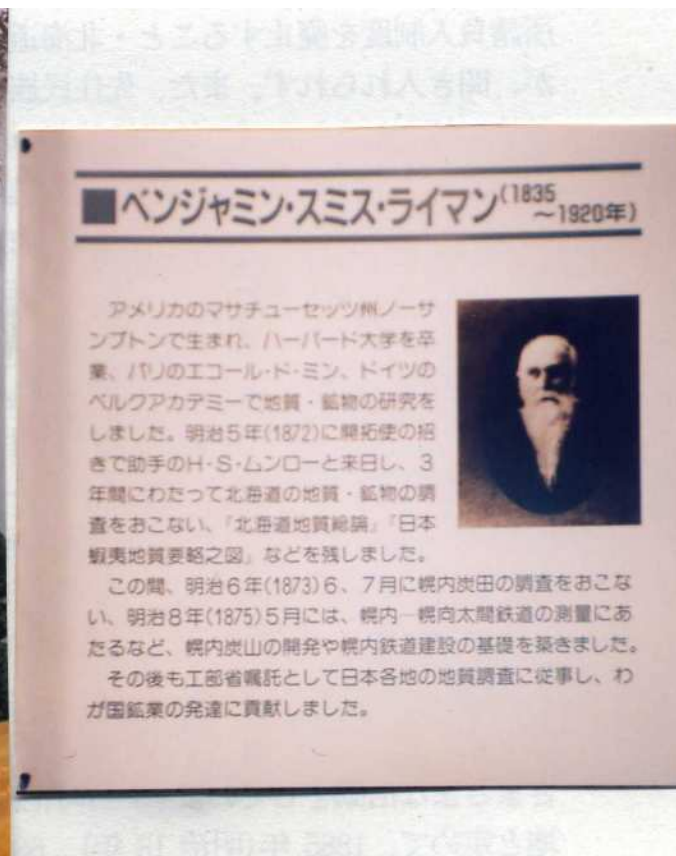


エドウィン・ダン

Edwin Dun (1848-1931)

アメリカ合衆国 オハイオ州出身

御雇教師、駐日公使



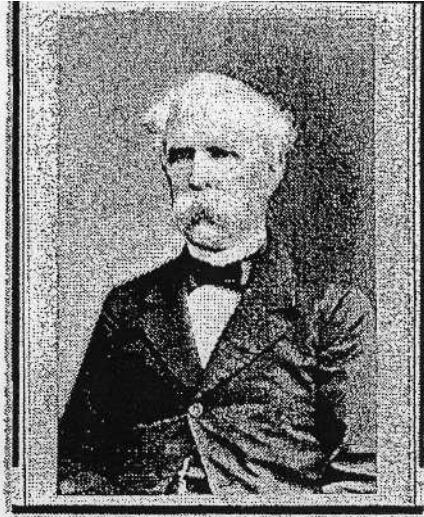
2006,10,10

三笠鉄道記念館

ベンジャミン・S・ライマン(1835—1920)銅像と説明版



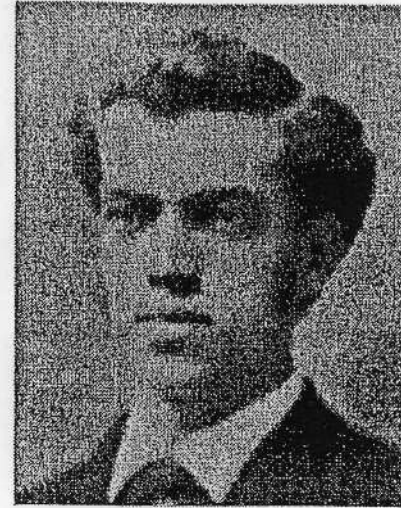
真駒内中央公園 エドウィン・ダン(1848-1931) 銅像



Horace Capron (1804-1885)



William Smith Clark (1826-1886)



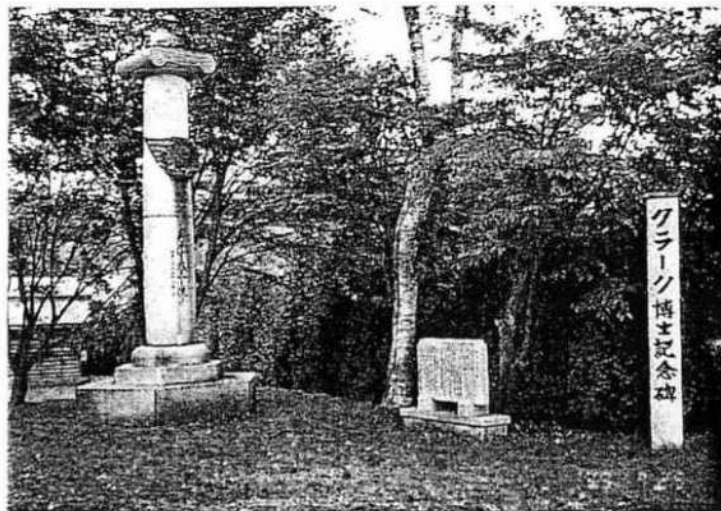
William Wheeler (1851-1932)



1879（明治12）年の札幌農学校アメリカ人教師と妻たち 左よりカッター、
ホイーラー、ペンハロー夫人、ペンハロー、ホイーラー夫人、ブルックス、ピーボディ



2008,6,28 北大構内散策 クラーク博士胸像前にて



「青年よ大志を抱け」の記念碑（写真の左側）



クラーク記念碑

明治十年四月十六日札幌農学校教頭ウイリアム
スミスクラークが島松駅通所市山文前宅に於ける
学生および職員と訣別した地を記念し昭和五年十月
クラーク英学会（発起人代表宮部金吾）により
記念碑が建てられた。

クラークは開拓使の招きにより明治九年六月東京へ
ペンハロー・ホイラーの二教師と共に着任し七月
札幌へ赴任同年九月札幌農学校教頭となり
翌年四月までの八ヶ月間在任した。
訣別に及ぶ青年の志を懐けの念のある言葉を
残したのは現在でも有名であり
塔奥のクラーク彫像の下にはホリスピーアジシス
とその言葉が彫られてゐる（村史要約）

クラーク年譜

- 一八三三年 米国マサチューセッツ州に生れる
- 一八五〇年 ドイツのギンゲン大学留学
- 一八五二年 帰米アマストカレッジの教授となる
- 一八五七年 マサチューセッツ州立農林大学長となる
- 一八六一年 札幌農学校教頭に招かれる
- 一八七〇年 帰米
- 一八七六年 マサチューセッツ州にて六十歳で歿す



島松・クラーク記念碑前にて

[2006,9,28 クラーク博士子孫、スチュー・クラーク氏ご夫妻来札]



羊ヶ丘展望台・松原晴哉氏と





①太平洋を渡る外輪船上のクラーク博士



②札幌の街並みを見下すクラーク博士の一行



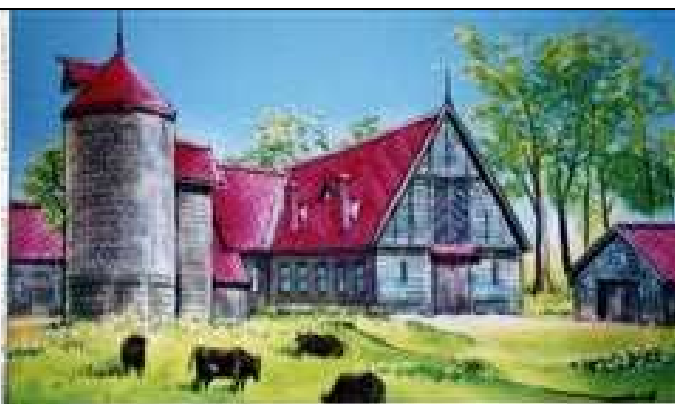
③札幌農学校入学式で挨拶をするクラーク博士



④「右手にペンを左手に鋤を」学問と農業実践を奨励
休み時間には雪球をぶつけて体をはぐす風景



⑥学生達と手籠山雪中登山で、新種クラーク苔を発見



⑧樺太王国北海道のシンボルとなった「モデルバーン」紹介



⑦「イエスを信じる者の誓約」を読む場面



⑨島松駅通でのクラーク博士別れの場面

(参考) クラーク博士居住地一開拓使本陣跡
(中央区南2条東1西丁目)



クラーク博士居住地 (開拓使本陣跡)



本陣前で別れを告げて帰国するクラーク博士。(馬上右から3人目)

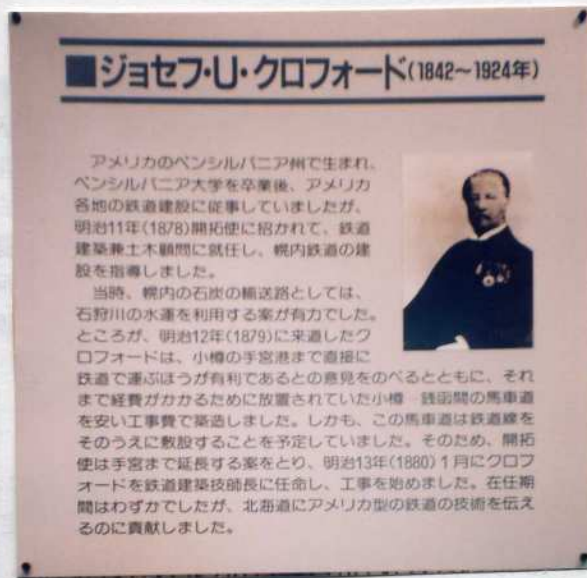
明治九年（一八七六）七月三十一日、W.S.クラーク博士（一八二六～一八八六）が札幌農学校初代教頭として米田から札幌の地に赴任した。宿舎はここ南二条東一丁目にあつた開拓使本陣と呼ばれる建物である。宿舎の役目を持つ本陣は明治五年に竣工し、建築面積八〇〇余平方米の木造平屋建ての当時としては最大の建物であつた。八年からは主にお雇い外国人用として使われ、工本工学校師ホーラーなども居住していたが、十二年に焼失した。クラーク博士は終始この本陣に居住し、ここから農学校の開校式に臨み、また建設まもない札幌のさまざまな施設等を視察している。明治十年四月十六日、クラーク博士は本陣前で馬上の人となり札幌に別れを告げ帰国した。



2007,7,14 ,小樽市総合博物館正面 北海道の鉄道の父 ジョセフ・クロフォード (1842 - 1924) の銅像前で



小樽市総合博物館前 北海道の鉄道の父 ジョセフ・クロフォード(1842 - 1924) の銅像と説明版



三笠鉄道記念館 ジョセフ・クロフォード(1842 - 1924)の銅像と説明版



三笠市 幌内太駅と三笠鉄道村・クロフォード公園

開拓使顧問 ホーレス・ケプロン



開拓使長官 黒田清隆



ホーレス・ケプロンの像

(背面の碑文)

左側の像 [大通公園西十丁目]

ホーレス・ケプロンは、アメリカ合衆国の人。明治四年わが国政府の招きに応じ、合衆国農務長官の要職を辞して、開拓使教師頭取兼顧問となり北海道開拓の大業に参画した。すなわち、多くの外国人技師を指導して本道の実情をきわめ、卓越した識見と豊かな経験に基づいて、北海道開拓の基本方策を進言し、開拓長官をたすけて、その実現に努めた。その勲業まことに偉大である。

ここに、北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会

会長 廣瀬 経一

黒田 清隆の像

(背面の碑文)

右側の像 [大通公園西十丁目]

黒田清隆は鹿児島県の人。明治三年開拓次官、のち開拓長官に任ぜられ北海道開拓の大任にあたった。清隆はその性、明察果断にして、開拓の知識を先進国に学ぶ必要を痛感し自ら海外におもむき、知見を広めるとともに、ホーレス・ケプロンをはじめ、多数の外国人技師を招き、その進言を入れ着々開拓の巨歩を進めた。

北海道開発の基礎は、まさに清隆の卓見により確立したものと云ふべく、その勲業まことに偉大である。

ここに北海道百年を迎えるにあたり、その偉業を回顧し、功績を永く後代に伝えるため、この像を建立する。

昭和四十二年十月

北海道開拓功労者顕彰像建立期成会

会長 廣瀬 経一

明治天皇が、明治8（1875）年、任務を終えて帰国しようとしていた
 ホーレス・ケブロンを招き、謁見して述べられたお言葉（英文）

ADDRESS OF THE EMPEROR TO
 COMMISSIONER CAPRON.

ADDRESS OF HIS IMPERIAL MAJESTY THE TENNO OF
 JAPAN.

(Translation.)

Since your engagement with the Kaitakushi, intrusted as you have been with the work for the settlement and development of the Island of Hokkaido (Yesso) you have so assiduously and faithfully executed your responsible duties, and advised the Chokuwan, that the important work of the department has been successfully carried out and it is daily progressing to our satisfaction. Indeed your services were valuable and deserve my high appreciation, and it is hardly a matter of doubt, that the future progress of that Island, the fruit of your labor, will much advance the happiness of my whole Empire.

Now, on your return to your country, on the termination of your engagement, I have to acknowledge your valuable services, and wish to express my good wishes for your future prosperity and happiness.

(和文)

朕 義ニ汝ヲ開拓使ニ聘シ北海道開拓ニ從事セシム汝能ク長
 官ヲ輔佐シ艱難職ヲ盡スヲ以テ事業皆其要ヲ得テ日月ニ進
 歩セリ朕深ク之ヲ嘉賞ス將來全道ノ繁殖ヲ致シ我カ國家ノ
 洪益ヲランフ復タ疑ヲ容ザルナリ今期滿ナ歸ラントス朕汝
 カ功勞ヲ表シ併テ將來ノ幸福ヲ望ム

勅語

REPORTS
AND
OFFICIAL LETTERS
TO THE
KAITAKUSHI.

HORACE CAPRON, COMMISSIONER

FOREIGN ASSISTANT



TOKYO
PUBLISHED BY THE KAITAKUSHI.
1875.

